

編集後記

吉澤が編集長、村野が校正、小生が原稿集めという役割で「水源地」二号の作成がスタートしたのは令和二年の晩春。

「いつも何もしないのだから、細かく声をかけろ」と叱られているので、六月末締切りだから、まあ、半分集まったとして、七月に誰と誰は絶対に書いてもらおうと計画しておりました。ふたを開けてみると、六月中旬にすでに二〇名を超え、原稿が出てないのは、吉澤編集長と小生のみ。六月末日の締切りの時の著者数は約三〇名になりました。こうなると、箱根の山から西の関西組、忍岡高校の諸氏の顔が眼に浮び、「イヤ、声を掛けていない、マズイ」という結果になりました。

ここでお詫び申し上げます。■わが恩師、貝沼先生と西岡水源地を散策すると、小さな芝生に囲まれたベンチがあり、そこでワンカップを楽しむ。(奥様がぬか漬けとともに小さな袋を持たせてくれる)「北海道は梅雨がないから意外と夏は長い。短いのは春だよ。水源地も公園になってから、趣が変わった」という言葉を思い出します。それでも、空に溢れているエゾハルゼミの声は、静かな水面にしみいつてあたりは静寂なのである。「狂言もかきつくしけり今さらに何をしからん命毛の筆(金井三笑)」(粕谷)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「水源地」寄稿者三名(札大露語科卒)について(敬称略)。中町礼願(須田弘、九期生)は本年五月幻冬舎から小説『ひび割れた社長の器』を上梓した。本誌21ページにその表紙カバーの写真を掲載した。内容はその帯の謳い文句の通りだが、女性像も印象的だ。■美水正一(三期生)は本誌所収の『三夫、その半生記』のほか長年の対ソ(露)貿易の商社マン生活に根差した

以下の連作をこのコロナ禍の時期に公表した。『ホテル・ナホトカ』『銃口』『見習い駐在員』『ゲーカーチェーペー(国家非常事態委員会)』。私家版の冊子形態だがどれも大変読み応えがある。■「水源地」創刊号(二〇一六年冬)に寄稿の三ツ野豊(一期生)には一九九八年から十年余に以下の著作がある。『浦島太郎未来編』『銀河の零一浦島太郎未来編 第二部』『銀河のさざ波』(以上は鳥影社刊)、『神々の告白』(柏艚社刊)。三ツ野はこの三年余「飯田梅子先生を支える会」の会長を務めた。本年の最高裁却下で札大に対する解雇撤回の裁判闘争は閉ざされた。「会」としての三年間の「総括」を望みたい。北方領土訪問団常任通訳・ロシア文学者の飯田梅子先生(札大露語科卒)のご健勝を心から祈り上げる。(七期生・村野克明、記)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

原稿料も払わないのに、よくこれだけの原稿を集めたものだ。これは偏に粕谷大人の人徳、ネットワークの広さの賜物だろう。しかし、感心してばかりもいられない。これほどの量の原稿を一人で編集するのは、正直かなりの力技だ。■普段は、閑職とはいえ、フルタイムの会社勤めをしている身で、のらりくらり日々を遣り過ごしている私だが、六月からは生活が激変した。寸暇を惜しんで原稿書きに励み、それが済むと直に編集作業に没頭した。執筆や編集作業はしばしば深夜にまで及んだ。おかげで、この二箇月間、多忙な日々の中でたいへん充実した日々を過ごさせていただいた。■この編集作業を通じて、執筆者の方々の熱意をあらためて感じさせられた。この際、質は問うまい。作品をご提供くださった方々の熱い思いが、それぞれ適切なおフォームを得て輝いて見えれば幸いである。(吉澤)

【お知らせ】

渡辺雅司先生が東京外大本郷サテライトオープンアカデミーで受け持たれてきたロシア語・ロシア文学の授業がコロナ禍の影響下、主催者側の方針で「講座中止」に追い込まれました。が、受講者と相談の上、場所を移して購読の授業は続行する予定です。他に一般社団法人「鎌倉ロシア塾」で初級・中級ロシア語を教えています。また文化・芸術・旅行事業を実施する一般社団法人「湘南ロシア倶楽部」では理事長としての活動もしています。以上の三団体にはHPがあります。詳しくは渡辺先生ご自身にお問い合わせください。

→masajiwatanabe1945@gmail.com

水源地 第二号

発行 二〇二〇年九月一日

編集 水源地編集委員会

発行者 粕谷 隆夫

〒三〇〇一七四一

茨城県常総市国生一三八〇番地

電話 〇二九七―四二一〇六二五